



曾祖父の戦争体験を受け継ぐ大学生

松岡 勲



定年退職後、大学の非常勤講師を勤めて一五年になった。今年度が最後の年だ。担当している科目は社会科学授業研究。前期授業のことだった。授業中「私の父は中国で戦死した」と話した所、後でY君が来て、「今年の三月に一〇一歳で亡くなった私の祖父（後で分かったことだが「曾祖父」だった）はシベリヤ抑留の体験があったと聞いています」と教えてくれた。私は「詳しい戦歴を知りたいのなら、兵籍簿を取り寄せるといい」と言い、翌週「兵籍簿の取り寄せ方」を教えた。兵籍簿の申請をすると、実際に来るのが一カ月ぐらいかかる。待っている間、父親がシベリヤ抑留からの帰還者である僕の友人、石井潤一さんと連絡をとった。彼の父は彼の一八歳の時に死亡し、定年後、父のシベリヤ抑留体験を調べている。「もし学生の兵籍簿が来たら、私はシベリヤ抑留について詳しくは知らないのですが、兵籍簿を見てほしい」と依頼した。

前期の最終日にY君はにっこり微笑みながら「曾祖父の兵籍簿が手に入りました」と言い、そのコピーをくれた。私は「僕の友人でシベリヤ抑留について詳しい人がいるので、兵籍簿を見ても

らってもいいか」と了解をとった。しかし帰って兵籍簿のコピーを見ると、「これはシベリヤではない！インドネシアだ」と驚いた。Y君にインドネシアの間違いであると連絡した。「曾祖父が私に太平洋戦争の話をよくしてくれたのですが、高齢の記憶違いでそう私に伝えてしまったのかも知れません」と彼は言う。石井さんにもその旨を伝えると、「若い世代がなぜ曾祖父の戦争体験に興味を持ったのか知りたいので、できたら三人で会えないか」と言う。九月中旬に三人で高槻市内で会うことになった。

Y君は二〇歳の大学生、石井さんは高校時代にベトナム反戦市民運動に関わった世代で六六歳。私は父が中国戦線で戦死し、戦後母の手で育った世代で七四歳。三世代がY君の曾祖父、米重秀雄さんの戦争体験について語り合うというめったにない機会だった。米重さんは今年（二〇一八年）の三月に亡くなった。Y君が持参した一〇〇歳の祝いの会場入り口で撮った米重さんの正装



米重秀雄さん百寿

した写真はかくしゃくとしてダンディーだった。米重さんは亡くなるまで大変お元気だったが、スーパーマーケットで倒れ、病院に運ばれてそのまま帰らぬ人となった。米重さんの家系は女系家族。米重さんの戦争体験の話を聞きたがらなかった。やっと曾孫の代に男子（Y君）に恵まれた。米重さんはY君の家族と同居だったので、米重さんはY君に自身の戦争体験を話して聞かせた。Y君は曾祖父が大好きで、自然と曾祖父の戦争体験に興味を持った。私たちが知りたかったのは「どうして曾祖父の戦争体験に今も興味を持ち続けているのか」だった。彼は「私が曾祖父の戦争体験を引き継がなかったら、僕の所でそれが途絶えてしまうから」と答えた。きわめて印象深い言葉だった。同世代とは戦争の話は通じないので、この話はしないとのことだ。Y君の持参した米重さんの原稿（戦友会誌に掲載されたものだろう）がある。いくつかの修正や補足が加えられ、丁寧な文字で書かれた、几帳面な人柄を感じさせられる文章だ。そのなかの一部分を紹介する。

米重秀雄さんは一九三九年九月熊本教導学校（下士官を養成する日本陸軍の教育機関）を卒業、陸軍の航空整備関係の部署を担当した。一九四三年八月広島県宇品港出帆から一九四六年五月帰還まで、中国（上海、武昌、海南島）、サイゴン、タイ、シンガポール、インドネシア（ジャカルタ、東ジャワ、チモール島、スラバヤ、フローレス島等）を転戦した。なぜこんなに広範囲の移動だったのか不思議だが、陸軍の航空隊と整備部門は分離していて、航空隊の進出にともなって、整備隊は追っかけて移動したも

のと思われる。

〈シンガポール陥落〉

「マレー半島南端のホーランジャンヤの王宮の城丘でシンガポールは黒煙の遙か眼下にあり、大重油タンクが数ヶ所から赤黒い猛煙を吐き、昼間でも暗くなる位だった。この時要塞砲の弾音がにぶいゴォーツと音を残して通過するのを二回聞いた。今でもその不気味な音が耳に残っている。（中略）上陸して三日目あちこちから万歳の声が聞こえてきた。シンガポール全島が陥落したのだ。」

〈連合軍捕虜の処刑〉

「（ジャワ島の）マラン飛行場附近の捕虜は連合軍であった。捕虜の脱走兵五名がつかまり、飛行場の端で処刑するとの事で行った。捕虜の数約一千名を炎天下に整列させて、その目前で憲兵隊の指導で執行された。周囲は歩哨が監視し、大きな生花環をそれぞれ五人の脱走兵の真横に置き、足と手を後手に縛り、直立させ目隠しの上、十人の狙撃兵が十数米から命令に依り「射撃」の号令で銃を発射、脱走兵はビクッビクッと動きうなだれて倒れた。憲兵が一人ずつ頭に拳銃で止めを一発ずつ打ち込んで終了した。刑場全員が茫然となっていた。後の話では命令に依り処刑執行の彼等は連合軍に呼び出されて、復員していないとの事だった。」

〈戦争末期のチモール島〉

「状況は益々悪化し、五月、戦隊機は全部チモール島を離れ、フイリピン方面へ移動した。制海制空権は完全に敵の支配下となり、その後友軍機を見る事はなかった。編成改編が度々下令され、警備隊附を命じられ、地上作戦の準備と訓練に明け暮れた。(中略) ジャワ方面からの物資の輸送船は片端から目前の沖で撃沈され、食糧難に陥り、チモール島北部の気候は半年が雨期で雨が降り続き、半年は乾期で極悪の条件の下でマリアは全員が感染していた。熱帯潰瘍や脚気で栄養失調と重なり、全員が何等かの病兵だった。食べられる物は何でも食べて、生きていた魚は、炭鉱出身者がいて、爆弾の火薬を抜き取り、空き缶に詰め込み海中で爆破させ、飛び込んで魚を捕らえた。幸いにチモール島への敵の空爆は小康状態となり、我々は食べることに明け暮れた。」

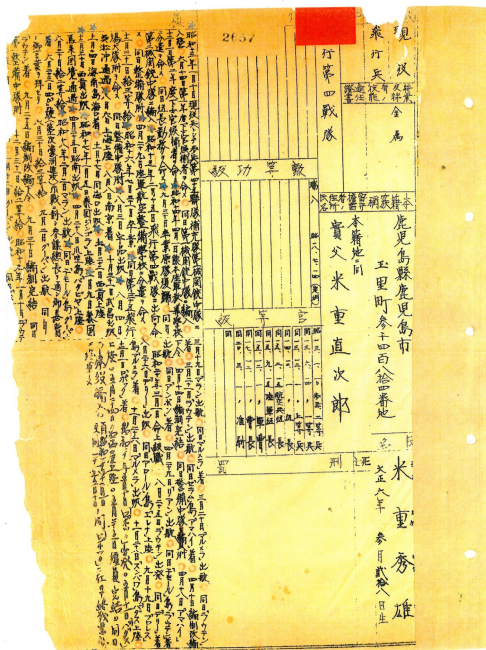
〈敗戦の混乱と復員〉

「八月十五日、航空通信の将校が顔を真っ青にして、終戦を部隊長に知らせに来了。まったく信じられない大事件だった。下士官兵には極秘命令で二日間発表しなかった。部隊の将校は硬軟二派に別れ、俺は硬派で部隊内は一時騒然となった。航空兵団司令部からの命令と部隊長の説得でどうにかおさまった。下士官の説得に対して部隊長は大変苦労された。(中略) 幸い犠牲者は一人も無く、全員命令に服し、チモール島にいた全部隊約一万名は島伝いに行軍、スンバワ島に集結した。部隊はここで武装解除し、二十一年五月十一日スンバワ島を出帆、二週間かかって五月二十五

日名古屋上陸、同日復員完了した。」

この後、帰国、家族との再会、戦後の労働運動への参加と続く。後日石井さんと会ったのだが、今回のY君との出会いは「楽しくった」と異口同音に語り合った。

(二〇一八・一〇・二五)



米重秀雄さんの兵籍簿